

# スジアラの栽培漁業について

スジアラは、西太平洋、インド洋に分布する大型のハタ類で、本県においては、奄美海域を中心に漁獲される南方系の高級魚です。

奄美地域においては、ハージンと呼ばれ、年間約10トン、3千万円の水揚げ（大島支庁調べ）があり、多様な魚種が利用されている奄美地域の沿岸漁業の中では、重要な魚種に位置づけられ、資源の維持・増大を目指す栽培漁業の対象種として、地元漁業者の期待が高まっています。

当栽培漁業センターにおいては、日本栽培漁業協会八重山事業場（沖縄県石垣島）の指導を得ながら、このスジアラの栽培漁業に関する技術開発に取り組んでいますので、その概要を紹介します。



養成中のスジアラの親魚

栽培漁業は、一般的に、種苗の基礎生産、種苗の量産、種苗の放流という流れで技術開発を行い、その成果をもって放流事業の実証へと移行します。

スジアラの種苗生産については、日本栽培漁業協会八重山事業場において、1ラウンド1万尾の稚魚(30mm)が生産されており、当センターにおいても、昨年は自前の親魚から採卵・ふ化させた稚魚の生産に初めて成功するなど、徐々に技術開発が進んでいます。

しかしながら、種苗の放流技術開発については、生態的な知見に乏しく、試験的に放流

する稚魚も少ないことから、多くの課題を抱えています。

一つは、放流効果を把握するための標識の技術開発です。スジアラの放流魚は、マダイやヒラメのように外見で判別できる特徴が出現しないため、現在は、胸鰭を抜去して放流していますが、できるだけ自然に近い形で放流する方法を検討したいと考えています。

また、一つには、放流時期や場所、放流サイズ等の技術開発があります。これらは、放流後の生残を高めるとともに、放流コストを縮減するために欠かせない技術開発です。

日本栽培漁業協会が平成9年度に沖縄県で実施した放流効果調査の報告書によると、珊瑚礁域においては、放流魚の餌料生物としてスズメダイ類、ベラ類等が重要で、自分の30~60%の体長の個体を捕食することが可能とされています。また、被捕食生物もニジハタ等のハタ類が多いとされています。

奄美海域においては、これらの知見が得られていないので、今後は、放流海域の餌料生物等の調査を進めたいと考えています。



スジアラの人工種苗

終わりに、平成15年度からは、先輩のNA主任研究員と組んでスジアラ栽培漁業の技術開発にあたることになりました。（寸劇以来の）迷コンビでがんばりますので、よろしくお願ひします。（栽培センター 江夏）

